

## 領域「表現」における ICT の活用と「内的」アクティブ・ラーニング －保育内容研究Ⅴ（表現 A）リモート授業からの考察－

遠藤 知里 森 広樹 田村 元延 花岡 清美 木下 藍 加藤 明代

### 1. はじめに

2020年度は、コロナ禍でリモート授業の実施を余儀なくされた。リモート授業とは、ICT(Information Communication Technology)を用いて、学生が登校することなく実施するスタイルの授業である。今年度、学生も教員も手探りで取り組んだりリモート授業であったが、終わってみればそれなりにおもしろみもあった。緊急事態宣言下での自粛生活は、意外と内的には自由で豊かなものであり、禍々しいことばかりではなかったのである。

本稿では、保育内容研究Ⅴ（表現 A）におけるリモート授業を振り返り、教員の立場からこの体験の意味を自由に考え、授業実践を評価し、今後の方向性を探してみたい。

### 2. ICT 活用と保育者養成（「保育内容の指導法」の中での取り扱い）

本学における幼稚園教諭養成の新課程では、現行の「保育内容研究Ⅴ（表現 A）」は、「保育内容の指導法（情報機器及び教材の活用を含む）」の1科目として再編される予定である。新課程のコアカリキュラムに提示されている「一般目標」と「到達目標」を下記に示した。ここに明示されているように、新課程では「保育内容の指導法」の授業を通して、情報機器および教材の「活用法を理解」し、保育の構想に「活用できる」こと、つまり情報機器の活用方法について「わかる」ことと「できる」ことが目指されている。

#### 一般目標

- (1) 各領域のねらい及び内容 幼稚園教育要領に示された幼稚園教育の基本を踏まえ、各領域のねらい及び内容を理解する。
- (2) 保育内容の指導方法と保育の構想 幼児の発達や学びの過程を理解し、具体的な指導場面を想定して保育を構想する方法を身に付ける。

#### 到達目標

##### (1) 各領域のねらい及び内容

- 1) 幼稚園教育要領における幼稚園教育の基本、各領域のねらい及び内容並びに全体構造を理解している。
- 2) 当該領域のねらい及び内容を踏まえ、幼児が経験し身に付けていく内容と指導上の留意点を理解している。
- 3) 幼稚園教育における評価の考え方を理解している。
- 4) 領域ごとに幼児が経験し身に付けていく内容の関連性や小学校の教科等とのつながりを理解している。

(2) 保育内容の指導方法と保育の構想

- 1) 幼児の認識・思考、動き等を視野に入れた保育の構想の重要性を理解している。
- 2) 各領域の特性や幼児の体験との関連を考慮した情報機器及び教材の活用法を理解し保育の構想に活用することができる。
- 3) 指導案の構成を理解し、具体的な保育を想定した指導案を作成することができる。
- 4) 模擬保育とその振り返りを通して、保育を改善する視点を身に付けている。
- 5) 各領域の特性に応じた保育実践の動向を知り、保育構想の向上に取り組むことができる。

3. 授業実践

3.1. 授業計画

本報告で取り上げるリモート授業について、授業計画の概要を表1に示した。今年度は、全30回中10回がリモート授業となったため、「個人的体験を他者と共有する方法」におけるICTの活用方法を学ぶ機会が、例年になく豊かに含まれることになった。

表1 授業計画の概要

授業日程	リモート授業での課題	学習内容
前期1 (リモート)	共通課題「春のごはんづくり」	共通課題「春のごはんづくり」を教材として、課題解釈⇒やり方(表現手段)⇒自己評価について、各々が「 <u>自分自身の方法</u> 」を理解する。
前期2 (リモート) 前期3 (リモート) 前期4 (リモート) 前期5 (リモート)	選択課題 ①「私の美的体験」 ②「マスクと〇〇〇マスク」 ③「春から初夏のリレー」 ④「春から初夏のハガキ」 ⑤「自由課題 好きな表現を楽しむ」	①～⑤の選択課題の中から、自らが好きなものを選択して取り組む。 ■ ICTで「 <u>個人的体験を他者と共有する方法</u> 」を学ぶ。 ① Microsoft Teamsで画像共有 ② ポータルサイトでテキスト共有 ■ 「ドキュメンテーション」、「ポートフォリオ」について概要を知る。自分なりに作成してみる。
前期6 (リモート)	「選択課題をふりかえって(まとめ)」	■ ICTで「 <u>個人的体験を他者と共有する方法</u> 」を学ぶ。 ③ Microsoft Formsでテキスト共有
前期7 (リモート) 前期8 (リモート) 前期9 (リモート)	「表現A サマープロジェクト」	教員が提示する27種類のプロジェクトのヒントから <u>好きなものを選択して</u> 取り組む。
(前期10～前期15 対面授業で実施)		
後期1 (対面)	「夏の手紙」(サマープロジェクト報告会)	「サマープロジェクト」のドキュメンテーションを展示し相互に鑑賞しあうこと、印象を「夏の手紙」としてハガキに書くことを通して、 <u>自己のアウトプットを開示し、他者のアウトプットに触れ、感じたことを言語化する。</u>
(後期2～後期14 対面授業で実施)		
後期15 (リモート)	「1年間の 私の美的体験」	授業「表現A」の1年間の美的体験を自己評価し、自由に表現する。 ■ Microsoft Teamsで共有し、 <u>他者のさまざまな自己評価のあり方を知る。</u>

## 3.2. ICT を用いた共有の実際

### 3.2.1. 画像共有によってもたらされたもの

画像共有の方法のひとつに、Microsoft Teams、学生がスマートフォンで撮影した作品等を共有する方法がある。Teams では、教員がコメント投稿したり、学生どうしで「いいね！」や「♡」等のボタンで関心を表明したりすることで、情報更新のフィードが学生個人の端末に届く仕組みになっている。これによって、Teams への頻回のアクセスを促す効果があったかもしれない。授業アンケートでも、「コメントが嬉しかった」という意見が複数みられた。

また、Teams での画像共有は、課題解釈が個人によってさまざまであることが可視化される機会でもあった。通常の授業では、学生がお互いの制作過程をチラチラと横目でみるうちに、当初豊かに存在していた解釈の差異が制作過程の中で収斂してしまうことがある。しかし、相互に他者の様子がわからないまま作業が進むリモート授業では、「他者と解釈が異なる」ことが意識されず、自分らしい解釈のまま制作が進行するという意外なメリットを発見した。Teams で他者の投稿を見ると、その表現の多様性に驚いた学生が多くいたようだ。そもそも、解釈（受取り方）が多様であるため、表現の仕方も多様なのである。

このように、画像を通して「目に見えるもの（作品）」と、そこから感じ取られる「目に見えないもの（意味）」を同時に共有できるツールとして、ICT の有用性を実感することができた。しかし、目に見えないもの（意味）については、確かにそこで共有されてはいるのであるが、わかりにくい。そこで、教員が言葉を添えることで、そこにある意味を「垣間見せる」という方法をとった。以下、筆者らが配信したフィードバックの内容の一例を示した。

#### ■「生活と結びついた表現」への気づき

- ※みなさんが表現することは、今の生活やこれまでの人生経験と深く結びついていますね。友だちの表現も、その背景に心を寄せると、いろいろなことが想像されます。ぜひ味わってみてください。
- ※子どもたちの表現は、高いプロセス性（過程そのものが表現である）がその特徴といえます。そのことを理解し、子どもの表現への感度を高くしてみましょ。また、過程そのものが表現という観点から、自分自身の心の動きへの感度も高くしてみましょ。
- ※子どもに「何のつもりなのか聞いてみる」と、おもしろいです。聞かなくてもわかってしまうときもありますが、あえて聞いてみることで、その創造性にあっと驚かされることが多いです。

#### ■「関係性の生成と、あたらしい物語の生成」への気づき

- ※表現活動は個人的ないとなみであり、その表現からひとりひとりの子どもを理解していくということが、とても大切です。
- ※それと同時に、生活を共にしている子どもと子ども、また保育者も含めて「共通する体験からあたらしい物語が生まれてくる」ということにも注目してみましょ。その物語（ストーリー）を理解できることが、保育者の資質として、とても大切です。
- ※オンライン授業では「共通体験」の実感を持ちにくいですが、同じ課題に取り組む中で他の人がどのような表現をしているか、Teams で関心をもって見ると面白いです。

#### ■「偶然のおもしろさ」たちがあがるわたしのイメージ

- ※今週は「春から夏のリレー（しりとり身体表現）にチャレンジする方がたくさんいて、毎日毎日おもしろく拝見させていただきました。
- ※「しりとり」なので、ことばの連続はまったくもって偶然です。しかし、不思議なことに、その偶然から新たなイメージが立ち上がってきませんか？

- ✿ 個々の経験が、イメージを意味あるものとして想起させます。豊かな直接経験は、内的なイメージの豊かさと結びつき、表現したい気持ちの基盤となります。それゆえ、乳幼児期には特に身体で直接感受する機会を大切にしたいものです。
- ✿ ことばは、イメージの媒体でもあります。子どもたちが発することばから、自らの内的イメージが豊かに立ち上がるとき、子どもとかかわることは本当に楽しいと思えるのではないのでしょうか。

### 3.2.2. テキスト（文章）の共有によってもたらされたもの

リモート授業では、①ポータルサイトのコメント送信機能、② Microsoft Forms に入力・送信する方法で、いわゆるリアクションペーパーやレポートに相当するものを学生が提出し、学生 - 教員間でのテキスト（文章）の共有を試みた。

これらのテキストを読んでもみると、自己の内面を丁寧に省察したものが多く見受けられた。Teams への投稿は、同時に他者との共有を強要してしまうものでもあったが、「他者が読まない」これらのレポートでは、より率直に感じたことを安心して表現している様子が伺われた。特に、「表現の仕方は人それぞれである」という点に言及したものが目立った。

別の観点から、テキスト共有の利点を検討してみたい。テキスト形式のビッグデータを解析する方法として、近年テキストマイニングという手法が注目されている。Microsoft Forms をはじめとするツールでは、収集したテキストデータを Excel 形式でダウンロードできる。また、現在は無料でテキストマイニングを試せるサイトが多数ある（たとえば株式会社ユーザーローカルのサイト「AI テキストマイニング」等）。これらを活用して、学生のレポートの解析を試みると、通常の評価方法では気づきにくい（テキストの中に埋もれている）意味を発見することができ、授業実践の意味理解につなげられるかも知れない。

試みに、前期 6 回目の授業の課題であった「(リモート授業の) まとめレポート」を、株式会社ユーザーローカル「AI テキストマイニング」を用いて解析してみた。

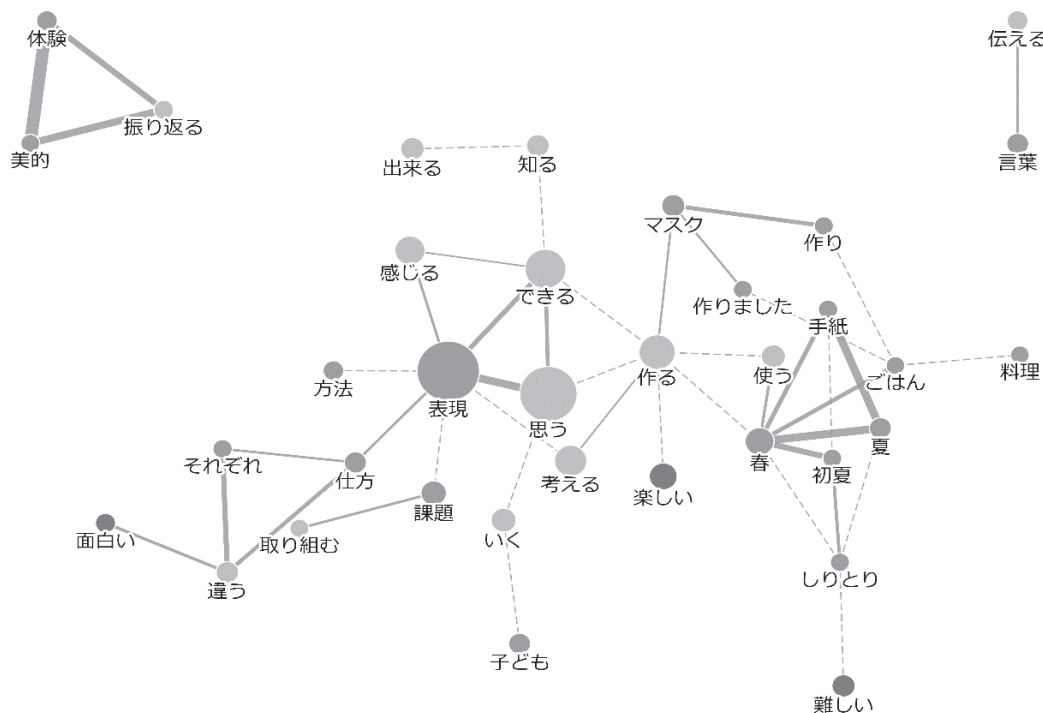


図1 「前期リモート授業のまとめレポート」の共起ネットワーク図

図1は、「前期リモート授業のまとめレポート」の共起ネットワーク図である。共起ネットワークは、ひと区切りの文（AIテキストマイニングでは、改行または「。」で区切られたひとまとまり）の中に、単語が共通に出現する関係（共起関係）を円と線で表示したものである。共起ネットワーク図では、どのような単語がセットで出現しやすいのかを直観的にキャッチすることが可能であり、直観から創造的発想を導くことができる。

たとえば、図1の左上に「美的 - 体験 - ふりかえる」から成る、他の単語とは共起関係を持たない独立した三角形がある。ここから想像を広げて、単語の組み合わせ「美的 - 体験」について共起数を確認すると60回であった。レポート提出数が158件であるから、60/158つまり約38%の学生がこの課題に言及しているかもしれないというアタリをつけることができる（もちろん、実際には文章を精査しなければ正確なところはわからないが、このようにして大量の文字列の中に埋もれた意味を探る手がかりを見つけることができる）。このことから、学生のふりかえりレポートの中で、「私の美的体験」という課題についての言及が高い頻度で認められ、この課題への取り組みが学生に影響を及ぼしているかもしれないということを想像することができる。

#### 4. 評価（学生理解と授業改善のためのふりかえり）

##### 4.1. 学生理解：表現の主体として「内的」にアクティブ

リモート授業では、ひとりでじっくりと主題にとりくむ環境が保証された。また、先述のように、課題の解釈が人によってさまざまであることに気づかないまま（言い方を変えれば自身の解釈を大切にしながら）表現活動に取り組むことができた。リモート授業では、ある意味、繭の中に閉じこもるような環境の中での授業参加がなされたことになる。しかし、このような中で、個々の環世界の差異をあるがままに肯定し、他者との間に自己を差し出すような体験がなされていたようである。以下、授業アンケートのコメントを引用する。

- まだ、そんなに会ったことのない人達に自分の作ったものを見て貰うのは恥ずかしかったです、環境が全然違うから、作品の個性が様々で他の人のものを見るのが面白かったです。
- 同じクラスの子でも顔を知らない子が多いため、「この子がこういった表現をしていた子か」と結びつかず、名前だけだともどかしかったです。これから知っていく中で一致させていけたらいいなと思います。
- 色々な人に自分の課題の投稿が見られていると分かると少し恥ずかしい気持ちになりました。しかし、他の人のアイデアで学ぶことが出来たので良かったです。

リモート授業により、学生間の直接のかかわりあいが極度に制限される環境ではあったが、これらの感想に見られるように、他者や他者の表現に対する開かれた雰囲気も生成していた。さらに付け加えるならば、先述の「私の美的体験」のように、課題作成者の想定を越えてエモーティブなものとして解釈された課題もあり、閉じられた環境下でも情動的なインプットが案外あったようだ。

以上より、リモート課題への取り組みの中に、情動へのインプットと表現というアウトプットが連動する内的な過程があったことが理解できる。伊藤亜紗氏は、「インプットとアウトプットの連動」を、生物学者のユクスキュルが示した環世界の概念<sup>3)</sup>において「主体」を定義づけるものであると紹介<sup>4)</sup>している。これらのことが、対面での授業における主体的な表現のあらわれに接続していることが想像できる。

## 4.2. 実践への示唆：アナログとデジタルの往還 対面授業での ICT 活用への接続

リモート授業は、学生と教員の双方が ICT に慣れる機会となった。このことは、対面授業開始後の授業内での ICT 利用を容易にするものであった。動画ファイルや音声ファイルを Teams で共有する機会が多くあり、こうしたメディアの持つ魅力や有用性、ICT による伝達力を学生が理解するために役立った。また、この経験は一方で、「メディアや ICT を用いて私たちは何を伝達し得るのか」ということについて考えるきっかけを与えるものだった。動画や画像は直接の感覚を伝えないが、強い情動喚起力により他者の身体にその感覚を注入することができる。おそらくその原点は、「光」と「音」という自然にある。

しかし、ICT によるこの「変換」は、私たちの身体におけるインプット・アウトプットの連動と相似の関係にもあるといえるのではないだろうか。ICT が私たちの身体に寄り添うこの時代に、表現というアウトプットを他者にインプットする、あるいは他者の表現というアウトプットを自己にインプットするというやりとりの方法論は、確実に変化している。渡邊ら<sup>4)</sup>は、「情報環世界」という新しい概念を提唱している。また、落合<sup>5)</sup>も「デジタルネイチャー」という「新しい自然」に言及している。ICT の存在すら自然と捉える柔軟な感受性が、これからの保育の場には求められているかもしれない。

## 5. おわりに

4月当初の、教員どうしや学生とのやりとりの履歴をふりかえると、自分自身を「ネットの森をさまよう赤頭巾ちゃん」と名付けたいほどだ。デジタルネイティブの学生たちにとっては、「さまよえる赤頭巾ちゃん」が提案している方法それ自体が、昔話や昭和の懐メロのようにレトロきわまるものだったかもしれない、自分自身の必死さと相俟って、なんとも不思議なおかしみにあふれた1年間のはじまりだった。

ネットの森では、驚くほどに情動と身体が近い・・・ということを知った。しかし、実際の山野を歩くと、自分自身の知覚と運動性が、身体と情動を近づけている。ICT という自然、という言葉違和感なく使う日がいつか訪れるのだろうか・・・さまよえる赤頭巾ちゃんは、老婆になっても毎日おもしろがりながら、ネットの森を歩き回っているかもしれない。

## 引用文献

- 1) 幼稚園教育要領解説（平成30年改訂）  
[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2018/04/25/1384661\\_3\\_3.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2018/04/25/1384661_3_3.pdf)（2020年11月17日検索）
- 2) 株式会社ユーザーローカル AI テキストマイニング <https://textmining.userlocal.jp/>（2020年11月17日検索）
- 3) ユクスキュル, クリサート (2005) 生物から見た世界. 日高敏隆・羽田節子訳. 岩波文庫.
- 4) 渡邊淳司, 伊藤亜紗, ドミニク・チェン, 緒方壽人, 塚田有那ほか (2019) 情報環世界 身体と AI のあいだであそぶガイドブック. NTT 出版.
- 5) 落合陽一 (2018) デジタルネイチャー 生態系を為す汎神化した計算機による侘と寂. PLANETS/第二次惑星開発委員会.